

# 立川さんのこと

## Professor Tachikawa

林 昭道 HAYASHI, Akimichi

● 国際基督教大学  
International Christian University

立川さんとの出会いは、秋のICUへの着任後半の時のことです。今から三十年近い昔になってしまいました。初めてお会いした立川さんはまだかなり細身で、敏捷な感じでした。当時、立川さんは留学先のアメリカから帰国したてでした。同じころ、心理学科の栗山先生も着任され、それ以降、三人とも、ずっと親しく過ごせたのは本当に幸運でした。

そのうちわかってきましたのは、まず、立川さんの研究の優れた力です。初め、Deweyなどアメリカの教育思想と教育の事実を追っていた（私にはそうみえた）立川さんが、授業の分担の都合で日本教育史を担当されると、その分野でも研究を進められ、例えば、日本の近代化や第二次世界大戦の敗戦にかかわる教育にまで研究の視野を広げられたようです。また、一貫して、「知識人・大学・社会」の問題を取り上げておられました。ご自身の生き方にも関わっている面もあったのかもしれません。

立川さんは、本当に多くの役職を果たされました。学内では、例えば、教育学科長、教育学研究科長のみならず、学生部長、大学院部長。それに先立って、ワース教養学部長から始まって多くの学長や学部長のアシストを勤められたと記憶しています。学外では、私の知る限りでも、学会の機関紙の編集委員、英文の校閲の役もなされました。立川さんの特徴は、ご自身の働きに全力を注ぎ、ご自分の主張に忠実で、しかも、他人からは不必要な非難を受けないことであると私には思われます。私の知らないところでは多くの困難もあったとは思いますが、それらに負けない粘り強

さを持っていたと表現するほうが正確かもしれません。

立川さんは学生の指導も熱心になされました。授業での声の大きさも含めて、卒業論文、修士論文、また、博士論文においても熱心でした。立川さんの卒業論文指導はやる気のある学生に満足を与えました。そして、修士論文、博士論文では、審査する教員の中にさえ積極的な問題提起をするものではなかったかと半分期待をこめて想像しています。

最後にわたしとのことを書かせていただきます。わたしは、ICUのことの多くを立川さんを通して知ったと実感しています。数年前に退かれた千葉先生から、国際教育の事実を見たのと似て、立川さんは、彼自らがこの大学の指標であり、成果であったと思われることになってなりません。ICUを退任されることを決意されてからでしょうか、私は立川さんと過ごす時間が増えたような気がしています。昨年度、共同研究の一環で、立川さんと共に、タイとフィリピンに出かけました。また、ハケ岳でなされたフレッシュマンリトリートの帰りに、立川さんの別荘に寄らせていただき、奥様もご一緒に、歓迎を受けました。楽しい思い出です。

今後も、どうぞ、私どもに、ご自身の経験に即した、明るいイメージを伝えてください。今は変革の時期なのかもしれません。この時を最後まで共有できないのが残念です。